

第29期第1回理事会議事録

日 時：1996年6月17日 16時30分～19時00分

場 所：気象庁内東京管区気象台会議室

出席理事：松野、関口、二宮、山岸、廣田、村松、住、
新野、田中(博)、木田、斎藤、竹村、笹野、
藤部、宇治、田中(浩)以上16名

出席監事：中村、篠原 以上2名

欠席理事：塩原、窪田、菊地、田中(正)、浜田、永田、
山下、加藤、中山、高橋、石島 以上11名

その他の出席者：大西第28期庶務担当理事、事務局(島津、松野、館)

議 事

1. 仮議長選出

新理事長選出までの議事進行のため、仮議長に松野第28期理事長を選出。

2. 第29期理事長の選出

定款第14条第2項の規定により審議した結果、松野太郎理事長を第29期理事長に選出。以後は松野理事長が議長を務める。

3. 理事長代理の選任

定款第15条の規定に従い、理事会での議論を参考に、理事長が関口理郎理事を理事長代理に指名。

4. 理事の業務分担について

以下のように理事の業務分担を決定、欠席理事の分担分については、庶務担当理事が本人に了解を取った上、最終決定することとする(7月2日までに、塩原、菊地、田中正、山下各理事に了解確認済み)。()内は副担当理事。

庶 務：竹村(斎藤)
会 計：斎藤(竹村)
総 合 計 画：木田(関口、二宮、住、田中博、
笹野)

天 気 編 集：関口(新野、藤部)

気 象 集 誌 編 集：二宮(田中博、塩原)

研 究 ノ ー ト：村松(塩原)

講 演 企 画：住(田中博、藤部)

学 会 賞 推 薦：二宮(菊地)

藤 原 賞 推 薦：田中正(住)

奨 励 金 ・ 各 賞：山岸(山下)

堀 内 基 金 賞：田中浩(笹野)

山 本 ・ 正 野 賞：菊地(廣田)

国 際 学 術 交 流：住(山岸)

教 育 と 普 及：永田(山下)

電子媒体利用計画：田中博(新野、塩原)

なお、藤原賞推薦委員会の副担当理事については、当該委員会委員の内の理事から選ぶこととする。

5. 常任理事の選任について

定款第14条第3項の規定に従い、理事のうちから、互選によって次の13名を常任理事に決定。

松野、関口、二宮、山岸、村松、住、新野、田中(博)、永田、木田、斎藤、塩原、竹村、

なお、山岸常任理事は1年で藤部理事と交替の予定。

6. 評議員・名誉会員の選任について

評議員の依頼は、幅広い分野と年代の方々に、学会とはやや離れた立場から建設的意見をお願いするのを目的としている。従来の選任方針は非常に良かったとの認識のもとに、今期についてもこの方針を引き継ぎ、次回の常任理事会で具体的な検討を行うこととする。

名誉会員についても、次回の総会までに必要な場合には新規に推薦することとする。

7. その他

ア 第29期各委員会の構成について

各業務担当理事(4項参照)は当該委員会の構成について、次回の常任理事会までに原案を作成しておく。このための参考資料として、事務局から、現在の各委員会のメンバー一覧表を担当理事に送付する。

イ 天気掲載の論文等の英文要旨(アブストラクト)について

国内各学会が発行する和文会誌の要旨の実態調査によると、気象学会以外のほとんどすべてで英文の要旨が必須となっている。ただ、和文の要旨の有無、図説については様々である旨、報告された。

ウ IAMAS オゾンシンポジウムの日本招請について

IAMAS(国際気象大気科学連合)オゾン委員会のオゾンシンポジウム西暦2000年大会(4年毎に開催)を日本で開催したいとの東京大学小川教授の招請状に対し、当該委員会メジ委員長から、本年イタリアで開催されるシンポジウムで検討するため、場所・施設・支援形態等についての詳細を連絡してほしいとの回答があった旨、報告された。

エ 学会大会の運営方式の改善について

これまで、学会大会の運営方式の改善について、

希望者が一律に発表する従来の形態から、分科会毎にテーマを定め議論を集中させる形態に変更する方針で検討してきた。担当理事より、来年春から実施するためには早めに実施案を決定する必要があるとの意見が出された。改善方向では合意が得られているが、従来形態の発表を希望する会員の発表機会をどの程度確保すべきかにつき意見が交わされた。

オ 会誌（「天気」）の広告掲載料値上げについて
「天気」の広告代理店によると、広告掲載料は現在6.5万円/頁であり、類似の他の学会会誌と比べて安いので、1万円程度値上げするのが適当との話があった旨、事務局から紹介があった。値上げによる収支の見通し等の資料が不足であり、次回常任理事会までに資料をそろえて検討することとなった。

1996年度山本・正野論文賞の受賞者決まる

受賞者：謝 尚平（北海道大学大学院地球環境科学研究科）

対象論文：A coupled ocean-atmosphere model of relevance to the ITCZ in the Eastern Pacific. Tellus, 46A, (1994), 340-350. (with S. G. H. Philander)

選定理由：太陽放射による加熱の中心が季節的に南半球、北半球を移動するにも係わらず、東太平洋並びに大西洋の熱帯収束帯は一年を通じて北半球に存在する。そして、その位置は東西に延びる海面水温の高い帯に対応している。他方、南半球の同じ緯度帯では海面水温は低く、海面水温場にも南北非対称性が見られる。北半球のみにITCZがあるということ自体は海岸線の傾きとか大陸分布の南北非対称性によるのであろうと考えられてきたが、何故に、大気海洋両方にこのような非対称性が現れるのかという点についての明快な説明はこれまで与えられてこなかった。

謝尚平会員は、風の収束場と海面水温の両方に現れるこの非対称性は大気海洋間の相互作用の結果であろうと考え、南北対称な外部強制下での南北対称なITCZが安定であるかどうかを東西一様な簡略化された大気海洋結合モデルで調べた。ここで導入された大気海洋相互作用は、風が強いところでは、潜熱を奪わ

れること並びに海洋表層での鉛直混合により海面水温が低下し、他方、海面水温が高いところでは、積雲が立ち、大気風の場が収束するというものである。東太平洋並びに大西洋の赤道上の海面水温は赤道湧昇の影響により低いので、海面水温と大気の収束場の対応で考えれば、南北対称な場では、ITCZは両半球に生じる。しかし、少しでも南半球の海面水温が低下すれば、南半球のITCZ上でも北半球のITCZに向かう南東風が吹く。この風により南半球の海面水温はさらに低下し、最終的には南半球のITCZは消滅する。このようにして、大気海洋両方に現れる非対称性は両者の結合不安定の結果として解釈される。

大気の平均的構造は、海面、陸面の境界条件を与えれば再現できる。しかし気候という観点からは、両者の結合系としての振る舞いを解明しなければ判ったことにはならない。当該論文は熱帯収束帯の南北非対称性という大気的基本的構造もまた、大気海洋間の相互作用の結果として理解されうることを非常に単純なモデルで示し、気候力学研究の一つの新しい方向を与えたものとして大変高く評価できる。よって、日本気象学会は本論文に対し、今年度の山本・正野論文賞を贈るものである。